

## 第 22 話 豊臣秀吉の朝鮮征伐

国内が平定すると、秀吉は眼を海外に向ける。 文禄の役。 慶長の役。  
 大いに朝鮮を征伐して、戦いには勝つが、外交に敗れて、ついにその目的を  
 達することは出来ずに終わるが、国威を海外に発揚した。

### 秀吉の雄図（雄大な計画）

全国は統一したが、秀吉の勢力はなお余った。 折から、佐渡、伊豆、但馬の生野などからは金銀が多  
 く算出して、又、五奉行の働きで、田地や貨幣の制度などもよく整って、国力が漸く充実して来た  
 ので、秀吉は、この機会において、久しく抱いていた海外発展の目的を達そうとした。 彼は先づ、朝鮮及  
 び明と交わりを修めて、ついでフィリピン、台湾と好みを通じ、ついには進んでインドにまでも手を延ばそ  
 うと思っていた。

### 朝鮮との修好

これより先き、高麗の李成桂が倭寇を撃退して、その功によって、勢力を得て自立し、国号を朝鮮と  
 改めたことは前に述べましたが、その後、朝鮮はわが対馬の宗氏とだけは交通をして既に久しくなってい  
 た。 それで、秀吉は先づ、宗氏に命じて朝鮮との修好をはからせ、又、朝鮮王に、わが国が交通を求め  
 ていることを明に伝えさせようとした。

ところが、朝鮮王李昖（宣祖）は、明が大国であるので、これを恐れていた上に、秀吉が、「もし明が応  
 じない場合には、大軍を發してこれを攻めるつもりである」などといっても、それはただ口の先の恫喝に過ぎ  
 まいと思っていたので、一向に取り合わなかった。

そこで秀吉は先づ朝鮮を定めて、明に及ぼそうと決心して、天正 19 年 9 月、朝鮮征伐の命令を發  
 して諸将にその用意をさせた（訳注：征伐とは、服従しない者を攻め討つ事です）。

### 太閤

そして、同年 11 月、彼は甥の秀次を養子とした上で、翌 12 月、天皇のゆるしを受けて、関白の職を譲  
 り、自分は太閤と称して、専ら朝鮮征伐の指図に当ることにした。 太閤というのは、関白の父、すな  
 わち前の関白の称ですので、平安時代以来、藤原氏にはいくらかもあるが、今日、太閤といえば誰でも秀吉の  
 ことと思うほどに彼 1 人が名高くなっている。 「大師は弘法に奪われ、太閤は秀吉に奪わる」という諺  
 が出来たのもその為です。

### 文禄の役

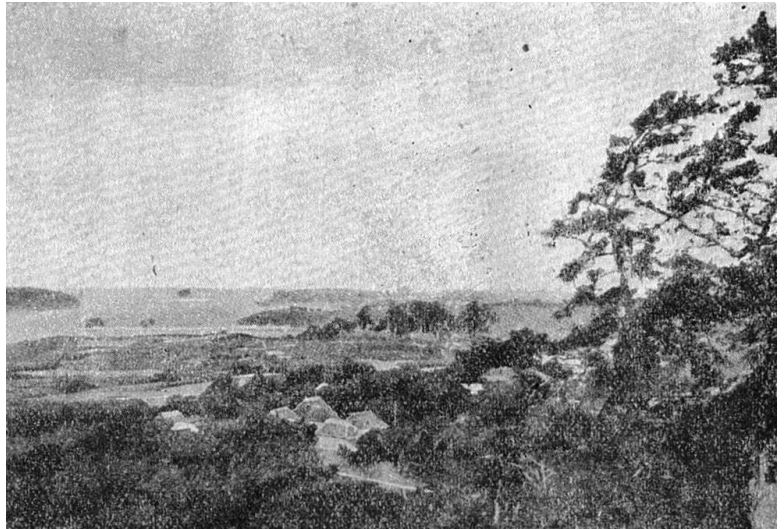
さて秀吉は、翌文禄元年（西暦 1592 年）に本営を置くことにした肥前の名護屋（佐賀県北部）に大い  
 に諸軍を集めて、自分は 3 月 26 日に京都を出発して、4 月 25 日にそこに着いた。

この時、集まった軍勢の総数は 300,000 余にのぼったといわれます。 そのうち、徳川家康、前田利家、

## 第22話 豊臣秀吉の朝鮮征伐

おだのぶお 織田信雄らはその兵 100,000 余を以って名護屋の本営を守るために留まったが、その他はつぎつぎと玄界灘を渡って朝鮮に向った。

先づ4月には、先鋒を承った小西行長、加藤清正の両将を始めとして、黒田長政、島津義弘、福島正則、小早川隆景、立花宗茂、毛利輝元ら 28 人を大将とする 130,000 の先発軍と、九鬼嘉隆、藤堂高虎、脇坂安治、加藤嘉明の率いる 9,000 余の水軍とが渡り、5、6月には元帥の宇喜田秀家を始めとして、増田長盛、石田三成、大谷吉隆、浅野幸長らの後継軍 58,000 が渡った。

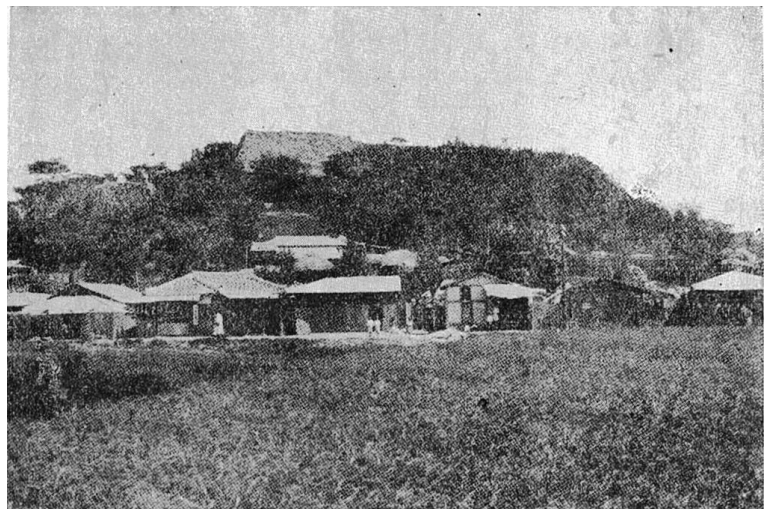


佐賀唐津市 名護屋城址から玄界灘を望む

毎日のように、幾千とも知れない軍船が、いづれも家々の紋のついた幕をうちまわして、思い思いの旗を押し立て、順風に帆を孕ませて行くさまはまことに美しく威勢がよかった。

### 八道占領

先鋒の小西行長は4月12日に釜山に上陸して、翌13日には早くも釜山城を囲んで、これを落とした。加藤清正は5日遅れて、同月17日に上陸して、第3軍の黒田長政はまた数日遅れて上陸した。そこで、行長、清正、長政の3軍は道を分けて3方から京城（今のソウル）を指して進んだが、戦えば勝ち、攻めれば取るで、沿道の守り



朝鮮釜山 釜山鎮の城址

はあれども無きに等しく、忽ちにして皆敗れたので、わが軍は破竹の勢いを以って京城に迫った。

王の李昫は驚いて平城（今のピョンヤン）に走り、シンの2王子は遠く咸鏡道の会寧を指して逃げた。それで、わが軍は容易に京城を占領して、更に道を分けて北進した。これより行長は平安道に進んで平城を陥れ、清正は咸鏡道に向って、ついに会寧を占領した。この時、清正はさきに逃げて来ていた2王子を虜にしたが、それに就いての1つの美しい挿話が伝えられている。

### 清正の慈愛

それは斯うです。---- 初め、清正が会寧に攻め入った時に、その地の役人が2王子及びその従臣らを縛って降って来ました。清正はこれを受け取ると、すぐに自分で2王子の縄を解いて、鄭重にこれを取り扱い、それからほとんど捕虜という感じをおぼえさせないように、親切にこれを待遇した。2王子は深

第22話 豊臣秀吉の朝鮮征伐

くその恩に感じて、後に和睦が成って、釜山から京城に送り還される時には、海よりも深い清正の恩は決して一生忘れないという意味の誓書を清正に差し出して別れたのみならず、京城に帰って後は、南大門の外に清正廟を造り、その像を掲げて自らこれを祭ったというのです。敵を愛するという美德は、わが国の歴史には昔からめづらしくないことではありますが、これは相手が敵国の王子であるだけに、一段とまた美しい、可憐な物語となっています。

さて、行長に京城を占領されると、朝鮮王李昞は、更に



かとう きよまさ  
加藤清正

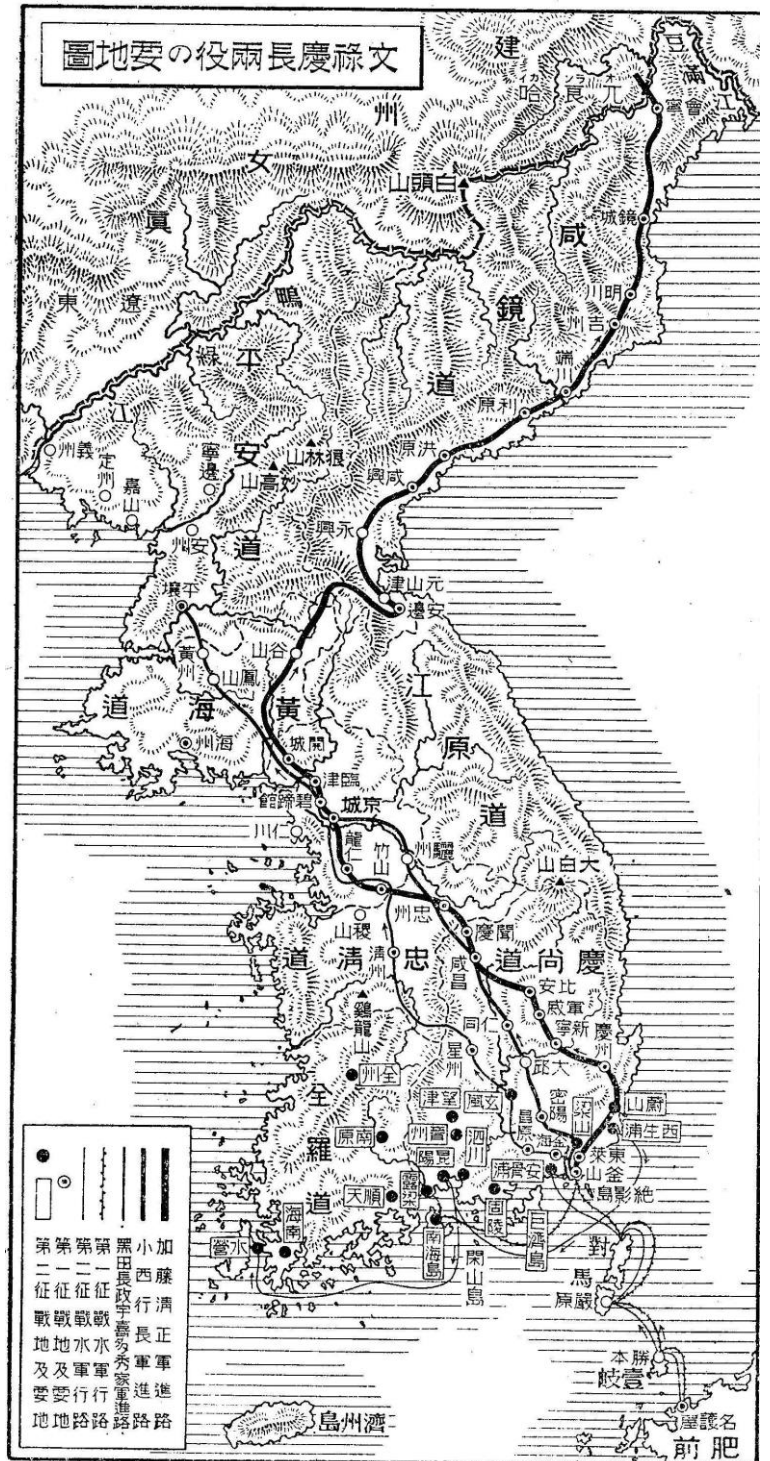
義州に走って、援兵を明に求めた。それで、明は先づ南満州あたりにいた兵を出して、王を援けさせたが、これもまた忽ち行長に破られた。

沈惟敬

明は大いに驚いた。ともかくも先づ日本軍の進撃をとどめておいて、その間に大軍を送る用意をしようと、そこで沈惟敬という者を使者として平城によこして、行長に和睦を申し込ませた。

行長はもとより明の真意がどこにあるのか知りようがなかったので、沈惟敬に会って、和睦の条件を示した。惟敬は、いちいちこれを尤もとした上に、一応明の皇帝の裁可を受けるためと言って、50日間の休戦を約して立ち去った。

ところが、期日は過ぎても沈惟敬は何も言っていない。行長は怒って、将に進撃を始めようとしていると、ふらりと沈惟敬が再びやって来た。彼は行長の条件通りで明も和睦を承諾したと言ったらしい。それで、行長は安心して、沈惟敬を伴って名護屋の本営に赴くことにしていた。



## 第22話 豊臣秀吉の朝鮮征伐

### 明の援軍

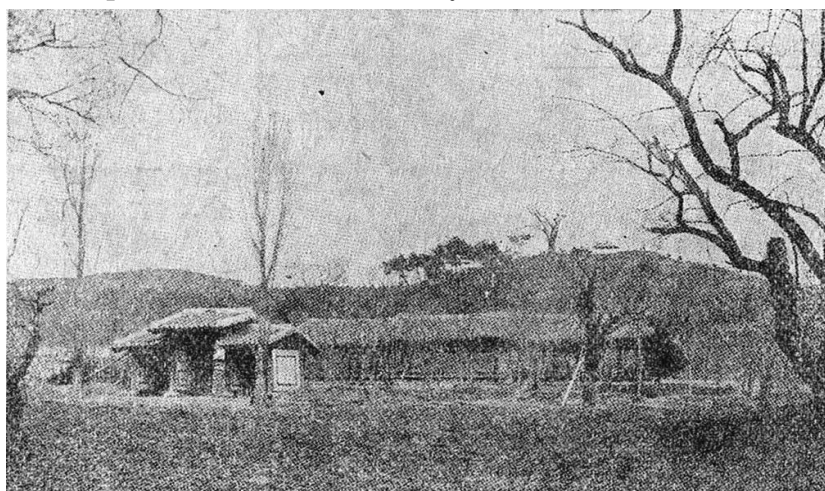
すると、突然、明の李如松が50,000の大軍を率いて来て平城を襲った。朝鮮の兵もこれに加わって200,000の大軍になったということです。

時は文禄2年正月7日の事で、こちらは全く休戦のつもりで油断していたので、忽ち大いに破られた。行長は兵を纏めて京城に退いたが、更に京城をも棄てようとして、平城以南の諸軍に引揚げの命を伝えました。

### 碧蹄館の戦い

ところが、この時、開城を守っていた小早川隆景は、すでに61才の老人でしたが、大いにこれを憤慨して、「大敵の来るのは何よりの仕合せだ。1つ我が手並みを見せてやろう、奮戦して斃れても、日本に隆景のあることを知らせるだけでも愉快ではないか」といって退かなかった。

彼は立花宗茂らと共に、京城の北12kmの碧蹄館に陣取って、追撃して来る如松の軍を迎え撃った。有名な碧蹄館の戦いがこれで、見事に6~7倍の敵の大軍を破って、首を斬ること10,000余の大勝利を得ました。



京城(ソウル)北碧蹄館の故址

しかも身方の戦死者は、わづかに百余人にしか過ぎなかったのです。

敵の大將の李如松も、乱軍の中で追い撃たれて、馬から落ちて、危うく突き殺さようとするところを、辛くも部下に助けられて、ほうほうの体で逃げた。

### 講和の条件

この碧蹄館の1戦は、たしかに李如松の心胆を寒くさせるに十分でした。彼は再び戦いをつづける勇気を失った。明の朝廷もまたこの上に戦おうとする気も無かったので、そこでまたもや沈惟敬をして行長に就いて和睦を求めさせた。平城での彼の不信を思えば、行長は当然、この申し込みなどは一蹴すべき筈だったのですが、しかしこの時には、一方、九鬼嘉隆らの率いた我が水軍が、しばしば鎮海湾方面の戦い(訳注:敵將は李舜臣)に利を失った上に、糧食も漸く欠乏して来ていたので、身方の将士の中にも帰国を望む者が非常に多かったので、ついにこれに応じた。そしてその条件を、しばしば惟敬と相談して、ほぼ決めた上で、文禄2年5月朔日、行長は明の講和使徐一貫、謝用梓らと共に惟敬を連れて釜山を発して、その15日に名護屋の本營に着いた。

秀吉は、その23日に明の使者らに面会を許した上、行長、及び石田三成、増田長盛、大谷吉隆の三奉行に命じて、その条件を議論させた。そしてその決まった条件は次の7ヶ条でした。

## 第22話 豊臣秀吉の朝鮮征伐

だいみんこうてい こうじょ むか きさき  
一、大明皇帝の皇女を迎えて、日本の后妃とする。

ひさ た ぼうえき ふっかつ にちみんりょうこく たが かんせんなら しょうせん おうらい  
一、久しく絶えていた貿易を復活して日明両国は互いに官船並びに商船を往来させる。

よし つう かわ たいかん たが せいしょ こうかん  
一、大明と日本とは好みを通じて渝らないと言うことを、両国朝廷の大官が互いに誓書にして交換する。

はちどう けいじょう ちょうせんこくおう かえ  
一、日本は朝鮮八道のうち、四道と京城とを朝鮮国王に返す。

かえ か ちょうせん おうじ だいじん ひとじち よこ  
一、右の四道を返す代わりに、朝鮮の王子と大臣を人質として日本に寄越す。

さき とりこ かえ  
一、日本は先に虜にした2人の王子を朝鮮に帰らせる。

だいじん しょうらいなが めい そむ せいしょ い  
一、朝鮮国王の大臣は、将来永く日本の命に背かぬという誓書を納れる。

ほごこく みるく たが  
これを見ると、明らかに日本は四道を得た上に、朝鮮を保護国とする事になっている。又、明国とは互  
なか こうさい しんるい ひでよし まこと もつと じょうけん  
いに仲よく交際して、親類にもなろうという事になっている。秀吉としては誠に尤もな条件となった  
ひでよし つか は かんぱくひでつぐ て へ ちょうてい そう さいか う  
のです。秀吉はすぐに使いを京都に馳せて、関白秀次の手を経て朝廷に奏し、ご裁可を受けて、これ  
ししや わた  
を明の使者に渡した。

ししや せいしき けつてい みる こうてい しょうだく え うえ こと きこく  
明の使者らは、正式の決定は、明の皇帝の承諾を得た上の事として帰国した。

ひでよし ざいせん しょうしょうし めい くだ ぶさんほうめん きよまさ  
そこで、秀吉は在鮮の諸将士に命を下して、ことごとく釜山方面にひきあげさせた。清正が2王子  
けいじょう おく かえ ひでよし めい よ ひでよし めい くだ  
を京城に送り還したのもこの時で、やはり秀吉の命に依ってでした。秀吉は、その後また命を下して、  
わ が へい いちぶ とど のこ よう と き  
朝鮮には我が兵の一部を留めるだけとして、その他は残らず日本に帰らせた。要するに彼は名護屋で取り決  
じょうけんとお こうわ で き しん  
めた条件通りで、講和が出来るものと信じていたのです。

た なん あいさつ こ  
しかし、明からは1年経ち、2年経ち、3年経っても、何の挨拶も来なかった。

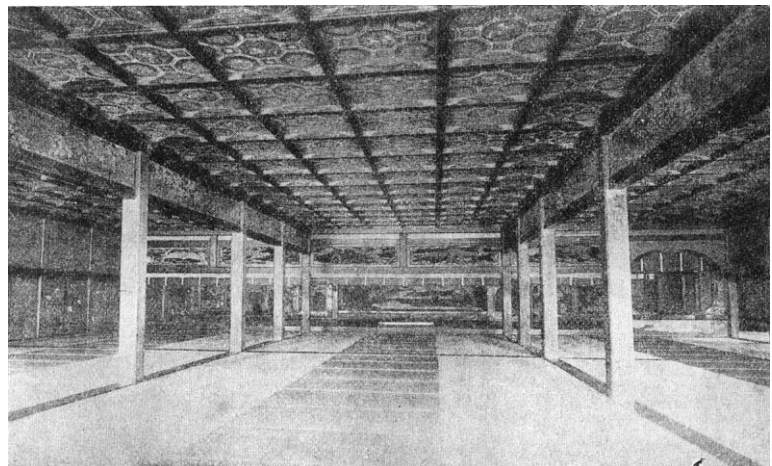
ひでよし ちょうせんせいぼつ ぐん お さいご みる こうわし く あいだ み うえ  
ところで、秀吉が朝鮮征伐の軍を起こしてから、最後に明の講和使が来るまでの間に、彼の身の上に  
お かんたん はな  
起こった事を、大きなものだけ2~3件、ここで簡単に話しておきます。

はは おおまんどころ な ひでよし ひじょう おやこうこう  
第1は、母の大政所が文禄元年の7月に亡くなったことです。秀吉は非常に親孝行な人でしたので、  
たいびょう き おどろ おおいそ かえ き りんじゅう ま あ  
母が大病と聞くと、驚いて、大急ぎで名護屋から京都に帰って来たが、ついに臨終に間に合わなかった  
こえ な かな びょうしょう じ なげ  
ので、声をあげて泣き悲しんで、その病床に侍さなかった事を歎きました。

よどぎみ だんし う よろこ  
第2は、その翌文禄2年に、大阪で淀君が男子を生んだことです。彼はこれを聞くと、大いに喜んで  
さつそく み かえ ひでよし ひでより  
で、早速これを見るために、大阪に帰って来た。これが秀吉のたった1人の子でした秀頼です。

### ももやまじょう きづ 桃山城を築く

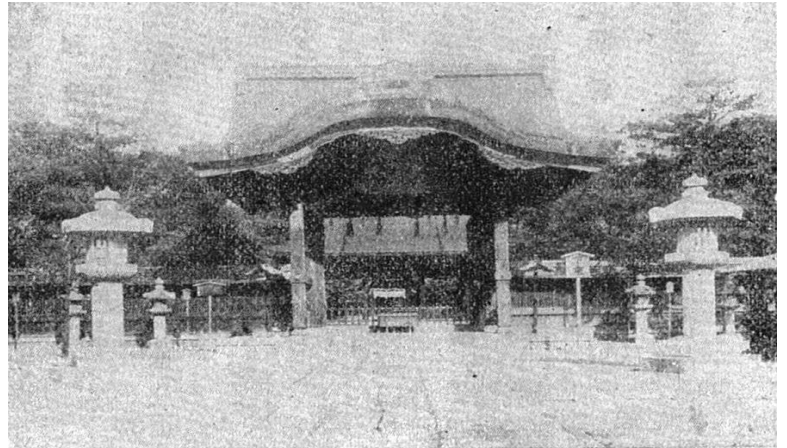
ふしみ ももやま  
第3は、その翌3年に、伏見に桃山  
じょう きづ ももやま  
城を築いたことです。彼の時代を桃山  
じだい ぼんねん  
時代というのは、彼がその晩年をここに  
いんきよ す いっばん れきし  
隠居して住んだからです。一般に歴史  
うえ のぶなが あづちじだい あわ あづち  
の上では、信長の安土時代と併せて、安土  
ももやまじだい ももやまじょう  
桃山時代といっています。この桃山城  
おおさかじょう じゅらくだい ひでよし ごうかい  
は、大阪城、聚楽第などと共に秀吉の豪快



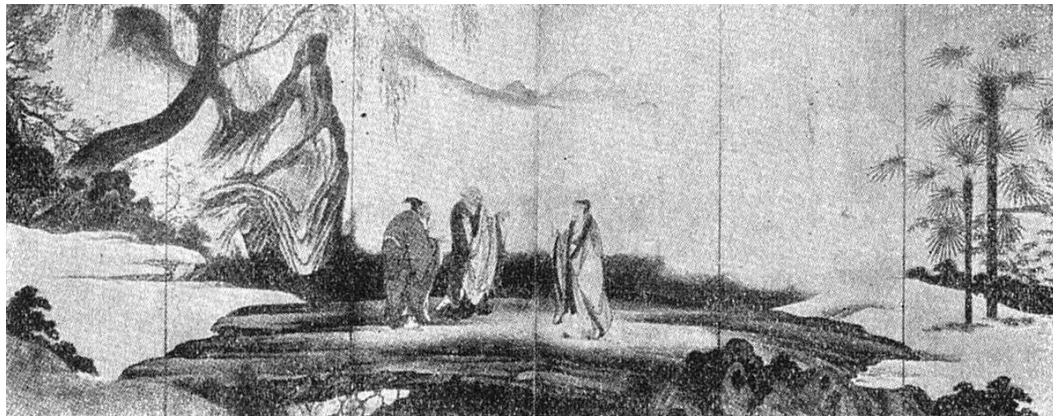
京都 にしほんがんに しょういん ももやまじょう いこう  
西本願寺の書院 (桃山城の遺構)

## 第22話 豊臣秀吉の朝鮮征伐

いちめん かま ゆうだい けんちく ちょうこく かいが  
な一面をあらわして、その構えの雄大なことでも聞こえています。又、その建築、彫刻、絵画などが桃  
山時代の芸術の粋をあつめた事でも聞こえています。 徳川3代将軍家光がこれを破壊してしまった  
ので、今はただその址を偲ぶにとどまるだけ  
ですが、それでもその建築の1部として今も  
にしほんがんに しょいん とよくにじん  
京都に残っている西本願寺の書院や、豊国神  
社 じゃ からもん  
社の唐門などを見ると、その雄大さと精巧さ  
がわかります。 かいが かのうは えいとく  
絵画は狩野派の永徳および  
さんらく びょうぶ ふすま さか ゆうけん ふで  
山楽が、屏風や襖に盛んにその勇健な筆を  
ふる こうず ゆうだい さいしき ほうえん  
揮った。 構図の雄大さと彩色の豊艶さに  
とくちょう うた  
その特長を歌われています。



京都 東山区 豊国神社の唐門 (桃山城の遺構)



かのうさんらくふで こけいさんしょうづ  
狩野山楽筆の虎溪三笑図

### 殺生関白

せつしょうかんぱく  
さて第4は、関白秀次の切腹事件です。 秀次が秀吉の姉の子で、相当に戦功もあったことはその時々  
に述べて来ましたが、彼が関白になって聚楽第でその職務を執るようになってからは、勢いに任せて、不  
謹慎な行いが多く、世間からは殺生関白などと謗られることも仕出かしたりしたので、ついに秀吉は怒っ  
て、文禄4年7月、彼を高野山に送って官位を取り上げた上に、切腹を命じた。

### 明の講和使

みん こうわし  
さて、明国の講和使は名護屋を立ち去ってから3年3ヶ月の後、即ち慶長元年8月になって、漸く来  
ました。 正史は楊方享、副士は沈惟敬です。 彼等は堺に上陸して、9月になって大阪城において秀吉  
に見え、先づ最初の日、持って来た明の衣冠などを献上した。 その翌日、秀吉はその衣冠を着けて、講  
和の式場に臨み、明の国書を読み上げさせた。

### 無礼な国書

ぶれい こくしょ  
ところが、先に7ヶ条にわたって定めたことは、ただの1箇所も含まれていないばかりか、全く思いも  
よらないことには、「特に爾を封じて日本国王と為す」というような無礼千万な言葉があった為に、秀吉は

## 第 22 話 豊臣秀吉の朝鮮征伐

かつ め いか おお いか こくしょ と な す みんな いかん む ほう うえ ゆきなが  
赫と目を瞋らして大いに怒り、国書を取ってこれを投げ棄てて、明の衣冠を脱いで放りつけた上に、行長が  
がいこう こと あやま いきどお しん いけい とも しけい ゆきなが おうふく ぶんしよ  
外交の事を誤ったのを 憤って、沈惟敬と共にこれを死刑にしようとした。しかし、行長が往復の文書  
だ すこぶ べんかい つと わづ し ゆる みんな お かえ とも ふたた ちょうせんせいぼつ めい  
を出して、頗る弁解に勉めたので、僅かにその死を許して、明使を追い返すと共に、再び朝鮮征伐の命  
れい くだ  
令を下した。



明の国書の一節

### 慶長の役

こうして翌年正月、小早川秀秋を元帥とし、毛利秀元、宇喜田秀家を副とし、黒田孝高を参謀として、  
こにし かとう りょうせんぼう い か まえ とお しんぼつ そうぜい およ  
小西、加藤の両先鋒以下を前の通りで進発させた。総勢は凡そ 130,000 ばかりでした。

けれども、今度は、前の征伐のために朝鮮の地がまだ荒れたままになっていたのに、糧食を求める  
こんなん ほんごく れんらく わる かいじょう ゆそう おも かえ てきぐん ぼうび  
ことが困難だった上に、本国との連絡も悪く、海上の輸送も思うようにならないのに、却って敵軍の防備  
じゅうぶん ととの 700,000 と号する明の援軍は既に朝鮮に入っていて、我が軍を防いだので、我が軍は僅  
か けいしょう ぜんら ちゅうせい さんどう せんりょう けいじょう すす え  
かに慶尚、全羅、忠清の三道を占領したばかりで、京城までも進み得なかった。

そのうちに、秋も過ぎて冬近になると、寒さは日に増して厳しくなるばかりでしたので、一時わが軍  
なんぼう ひ あ ふゆ おく きよまさ よしなが うるさん しまづ よしひろ しせん かた  
は南方に引き上げて、冬を送ることにした。それで、清正、幸長は蔚山を守り、島津義弘は泗川を固め  
て、小早川秀秋は釜山に陣所を構えていました。

### 蔚山の籠城

ところが、12月22日、明の楊鍋という大將が、100,000の大軍を以って急に蔚山を襲った。折か  
ら、清正は西生浦 -- 蔚山の南方約 32 km の海岸 --- の砦の修理に出かけていたが、急報を受けると、  
すぐにその夜、海路を漕ぎ帰って城中に入った。明軍はいかにしても城を落とそうとかかったが、徒ら  
に兵を失うばかりで、容易に陥れることが出来なかったのに、ついに長囲の計をたてて兵糧攻めにし  
ようとした。

糧食は忽ち尽きた。城兵は紙を噛み、壁土を煎じて飲んで飢えを凌いだ。折りしも北風が激し  
く吹いて、寒さはますます烈しく、地には大雪が積もり、士卒の凍傷するものも多かったが、清正らの意  
気は少しも衰えなかった。翌慶長3年正月、小早川秀秋らが道を分けて来て援けて、明の大軍のうし

## 第 22 話 豊臣秀吉の朝鮮征伐

おそ とき じょうちゆう う で とも おお てき やぶ くび き  
ろを襲った時には、城 中 からも討って出て、共に大いに敵を破って、首を斬ること 13,000 余にのぼった  
といわれる。

### ひでよし こうきよ いめい 秀吉の薨去とその遺命

ところが、その年の6月に、秀吉は病気に罹って、8月18日、ついに伏見城に薨じた。年は63才  
でした。1人息子の秀頼は僅かに6才の幼児ですが、弟の秀長もすでに天正19年正月に薨じてしまい、  
信じるべき血縁の者といっちは一人もいないのですから、さすがの秀吉もこれにはさぞ頼りない気がしてい  
た事だったでしょう。

か せいじ そうだんやく ごたいろう とくがわいえやす まえだとしいえ うき たひでいえ もうりてるもと うえ  
彼は予ねてから政治の相談役としていた五大老である徳川家康、前田利家、宇喜田秀家、毛利輝元、上  
すぎかけかつ はじ おも だいまようれんちゆう ひでより ひでよしどうよう こころえ そりやく こと ひつとう  
杉景勝を始め、主なる大名連中に、「秀頼を秀吉同様に心得て疎略にしない」という事を筆頭にして、  
すう かじょう せいしょ したた どうよう いみ せいしょ つく こうかん  
数箇条の誓書を認めさせた上に、五大老相互の間にも同様の意味の誓書を作ってこれを交換させた。

こうして8月8日、いよいよ全快の見込みがないと自ら諦めたと見えて、家康と利家の両人を枕  
もと よ ちょうせん しゅつべい しょうしょうし よ かえ めい いえやす ふしみ せいむ  
頭に呼んで、朝鮮に出兵している諸将士の呼び返しを命じた。そしてなお、家康には伏見にいて政務を  
み としいえ ひでより もりやく い わた うえ ひでより せいじん のち いえやす ひで  
見、利家は大阪にいて秀頼のお守役をするようにと言いつつ、秀頼が成人した後は、家康の子の秀  
ただ せんひめ つま やくそく むす  
忠の娘千姫をその妻にするようにと、その約束までも結んだのでした。

### しせん えき 泗川の役

ひでよし こうきよ き いめい ちょうせん しゅつじんちゆう しょうしょう さん さび ひきあ  
秀吉の薨去を聞き、その遺命によって、朝鮮に出陣中の諸将は惨として淋しく引揚げようとして  
ついたち みるぐん にわ しまづよしひろ しせん おそ よしひろ  
いると、10月朔日、明軍は俄かに島津義弘を泗川に襲った。敵は200,000という大軍でしたが、義弘は  
わづ へい も おお ふんせん やぶ くび え よきゆう  
僅かに5~6,000の兵を以って大いに奮戦してこれを破った。首を獲ること38,700余級でしたといわれ  
る。さきに蔚山の大勝があり、今またこの奇勝があったので、我が軍がいよいよ帰国の途に就いたころ  
てき ひでよし こうきよ し あ ついげき われ ぐん みな とし  
には、敵も秀吉の薨去を知ってはいたが、敢えて追撃しようとしなかった。我が軍は皆その年のうちに  
ぶじ ひ あ  
無事に引き上げました。

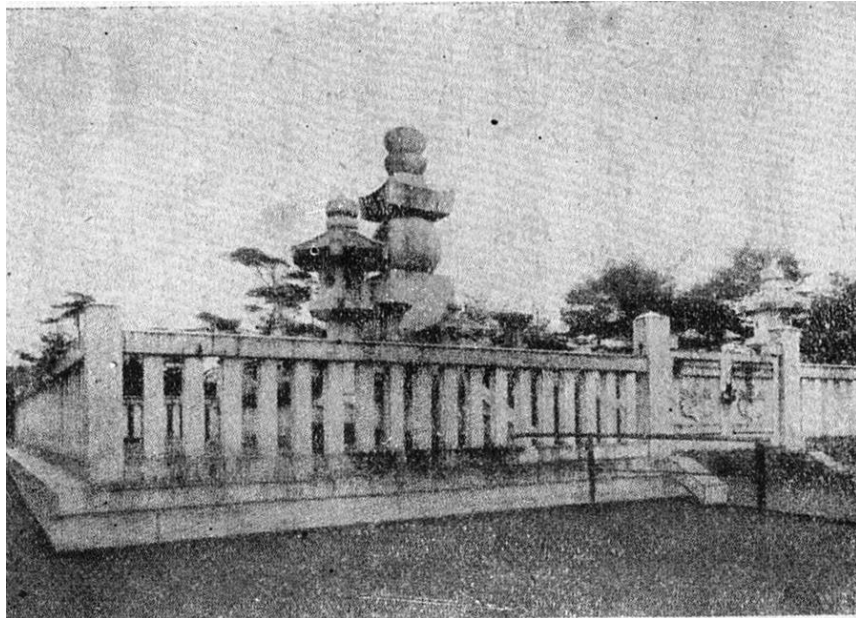
こうして前後7年にわたった朝鮮征伐も、その目的を達することは出来なかったが、国威を海外に  
はつき おお やくだ ぜんご りょうえき ねんごう と ぶんろく えき  
発揮することは大いに役立ったのです。前後の両役は、いづれも年号を取って、前の役を文禄の役と  
けいちよう えき  
いい、後の役は慶長の役といっています。

### とよくにじんじゃ 豊国神社

いめい ひでよし いがい ひがしやま あみだがみね ほうむ ふもと びよう た  
なお、遺命によって、秀吉の遺骸は京都の東山の阿弥陀峰に葬り、その西の麓に廟を建てた。朝  
ひでよし たいこう とく ちよく やしろ とよくにだいまようじん ごう たま しょういち い きづ  
廷は秀吉の大功をおぼしめし、特に勅してその社に豊国大明神の号を賜い、正一位を授けた。  
たいしょう さら ひでよし たい しょういち おく すなわ ひでよし かみ ひと  
なお、後に大正天皇は、更に秀吉に対して、正一位を贈られた。即ち秀吉は、神としても人としても、  
しょういち  
正一位となったわけです。

べっかくかんべいしゃ とよくにじんじゃ すなわ ひでよし まつ やしろ  
今、京都の別格官幣社 豊国神社は、即ち秀吉を祀った社です。





京都 阿弥陀が峰 豊臣秀吉の墓

### 美術工芸

桃山時代の美術工芸は、聚楽第や伏見城のことを述べたときに、少し言い及んだ通りで、一体に、秀吉の豪壮な気性を受けて、雄大で、壮麗で、闊達な特色を帯びていました。室町時代のものは、たとえば金閣や銀閣のような建築にしても、光彩は燦然としている代わりに、どこことなく纏りがついて、沈静して、悲哀な調子さえ帯びています。しかし桃山時代のものには、たとえば西本願寺の飛雲閣や書院のような、聚楽第や伏見城の遺物を見ても、何となく雄大で、底力がある、人を威嚇するようなところがあります。ますます動いて活躍しようとしていた秀吉の気性がおのづから現れたとも見るべきでしょう。

### 左甚五郎

絵画に狩野永徳及び山楽の出たことは前に述べましたが、この時代は、彫刻にもまた有名な左甚五郎が出ています。神社や寺院の装飾に非凡な手腕を示して、名を後の世に残したのですが、今も世に残っている古い彫刻の中で、少しすぐれたものがあると、それを誇ろうとする人々は、殆ど皆一様に、どれもこれも左甚五郎作と言おうとしているのを見ても、いかに左甚五郎が名人であったかが分かります。

### 茶の湯の流行

茶の湯もまた前代に引き続いてますます盛んに行われた。かつて秀吉は、北野の松原に800余の茶席を設けて、いやしくも茶のたしなみのある者は、貴賤を問わず、貧富を論ぜず、誰でも来て共に楽しむことが出来るようにしたことがある。この道の名人には、有名な千利休が生まれました。従って、茶器にも色々の名品が出るようになり、漆器や陶器なども大いに発達した。蒔絵の進歩も著しかった。秀吉の夫人、即ち、北政所が秀吉が薨じた後に尼になつて閑居した京都北の高台寺には、その模範的な名品が多く残っているので聞こえています。

( 第 22 話 豊臣秀吉の朝鮮征伐 終わり。 前頁に戻り、第四巻の終わり )